

## 全国国立大学における教養外国語開講状況調査

新潟大学

大学教育開発研究センター 津田 純子

大教センターの津田と申します。

お手元にお配りした資料には、レジュメと、質問 1、2 といった、すごく小さな表が載っているものがあります。

私の報告は、平成14年 9 月に、国立大学99校に対して七つの質問事項で作成した調査用紙を郵送し調査いたしました。回収率は72%でした。

平成13年の内閣府調査で明らかのように、大学教育に対して国民一般がどんなことを求めているかと言えば、やはり最初に外国語のコミュニケーション能力が54%ぐらい、異文化による理解というのが36%、国際マナーを36%ぐらいが、大学教育で身につけたほうが良いということです。このような世論を背景として中教審答申等によって、大学外国語教育の改革というのが求められているわけです。

本学でも、英語教育については手段として、文化とかそういうものを学ぶ科目としては、初修外国語教育という形で進めるべきではないかということでこれまで検討されてきているわけでありまして。

全国でそういう社会の要求等に対してどういう改革が進められているか、明らかにしながら、本学の外国語教育の改善をしたいということで今回調査をいたしました。

2 番からグラフ等を参考にしながら説明をしていきたいと思っております。まだ完全には分析は済んでおりませんので、後に報告書でまとめたいと思っておりますけれども、現時点で分析できた点についてお話をしたいと思います。

まず、質問事項の第 1 は、平成13年度 2 月期にどれぐらい外国語科目が開講されましたかというものです。まずは、クラス数はどれぐらいですかという質問をいたしました。それについて解答が得られまして、大体クラス数は、やはり英語のほうが一番多くて、全体の平均クラス数から言いますと英語82%、ドイツ語 7 %、中国語 5 %、フランス語 4 %、ロシア語、朝鮮語、スペイン語 1 %というような状態でクラスが設けられています。

次に開講科目数についてですが、英語は53%、それからドイツ語は19%。ドイツ語はクラス数でいいますと 7 %だったのですけれどもフランス語はクラス数としては 4 %に対して 9 %。ロシア語は 1 %に対して 2 %。中国語はクラス数が 5 %に対して開講科目数は12%というような状況があります。

これを見ますと、やはり英語については、クラスの人数が多くて、恐らく開講科目数がクラス数に対して少な

いということになるのではないかということです。初修外国語につきましては、クラスの人数規模が少ないのに対して開講科目の数が多いというような状況ではないかと思われまして。

開講科目の平均数につきましては、大体平均的には 5 科目ぐらいが開講されております。その中でも英語が最も多いわけですがけれども、その次にフランス語、それからドイツ語、そして中国語等になるわけでありまして。

多言語傾向で開講している大学としましては、以前に本学の大教センターで調査したときと同じように、一番多いのがやはり東京外国語大学で、当然といえば当然ですがけれども、東大、名大、千葉大学、大阪大学、琉球大学等が挙げられます。

現在の状況におきましては、例えば私立大学で一番多く開講しているのは29カ国を開講している東海大学があります。それから、法政大学なんかは、DILAという大学書林国際語学アカデミー（語学専門学校）と提携して、より多くのアジア語を開講しようというような動きも見られます。

次に行きまして、第二の質問事項は、外国語の卒業単位要件はどういう状況ですかというものです。卒業単位要件を全学共通にしている大学は富山大学と金沢大学、それと若干の単科大学でほかは全般的には学部等によって、卒業単位要件を個別に規定しているようであります。

単位要件で、単位数15単位以上を課している大学は東北大学、お茶の水大学、一橋大学、名古屋大学、京都大学、和歌山大学、福島大学、東京大学、高知大学、山口大学です。その中で、卒業単位要件で回答が得られた329の学部学科、大学のうちの27校、つまり8%が英語のみを卒業単位要件にしております。これをざっと見ていただきますと、大体、医学部、あるいは理系が多いというような印象があります。

それから、次に、英語必修をはずして、1 外国語単位で何単位とか、2 外国語で何単位とか、すべての外国語で何単位というような形で卒業単位要件を設けている大学があり、このタイプをこの「英語必修はずしタイプ」としております。「英語必修はずしタイプ」の学校数は81校で、大体全体の24%ぐらいなのですが、24%の中で、1 外国語で卒業単位要件としているのが35%に当たります。そこでは大体どれぐらいの単位数を

課しているかといいますと、4から8単位ぐらいです。そして、「英語必修はなしタイプ」校のうち2外国語の中で何単位というように卒業単位要件を課しているのが38%で、これが1外国語で何単位という大学よりも若干多いわけです。この場合大体課している単位数は、もう少し多くて8ないし20単位になっております。すべての外国語の中から何単位というように課し方、定め方をしているところは、必修はなしタイプの中で18%を占めておりまして、課されている卒業単位数というのは6から12単位になっております。

こうして見ますと、「1外国語で」というのが一番課されている単位数として少ないことがわかります。2番目に多いのは、すべての外国語で何単位という課し方です。それから、2外国語でという卒業単位の課し方が一番単位数が多くなっているという傾向が見られます。

この例外としてお茶の水女子大学、あるいは奈良女子大学等を見ていただきたいと思います。お茶の水女子大学では、今言ったような単位数の順序でいきますと、少し違っておりまして、かなり高い単位数を1外国語で課したりしているわけです。

次に、初修外国語のみを卒業単位要件数として規定しているところは、大体全体の2%に当たります。ざっとそれを見ていただいてわかりますように、規定されている単位数というのは4単位から12単位ぐらいでありまして、どちらかというと人文系が多いという印象を受けます。

それから、初修外国語を重視した形で卒業単位要件数を、単位規定を設けているところは、全体の2%ぐらいに当たります。見ていただいてわかりますように医学部、医学系、あるいは人文系に多いようです。単位数は、10から18単位という形で課されています。

英語と初修外国語を同じ単位数だけ規定しているパターン、タイプというものは、35学科等ありまして、これは全体の9%を占めております。どういう形で単位数を規定しているかという点、4単位プラス4単位、あるいは6単位プラス6単位、あるいは8単位プラス8単位ということで、単位数は大体8から16単位の間で規定しているようです。このパターンを採用している所は、教育系、あるいは社会科学系、これは理系にもわたっているように思われます。

卒業単位要件について回答した中で過半数を占めたのは、「英語重視型」といってもいいような単位の課し方、単位規定のあり方です。大体これは全体の53%ぐらいを占めておりまして、まず英語の単位数を設定しておきまして、そして初修外国語、あるいは英語から何単位というように課し方、規定の仕方をしております。ちょっと資料のほうを見ていただきますと、すべての外国語から何単位というように書き方がされていますけれども、それはいわゆる初修外国語に書いてある単位数について、これは英語でもいいよという形の規定の仕方をしてしているということです。この場合は単位数としては8単位から12単位で定めている場合が多いようです。

では、次の質問に移りたいと思います。次の質問は、外国語科目をどのように単位計算していますかというものです。質問3という資料のほうを見ていただきますと、1単位15時間の扱いをしている場合と、30時間の扱いをしている場合と、45時間の扱いをしている場合について丸をつけていただきました。1単位15時間の扱いをしている大学というのは、全体で20.8%です。1単位30時間の扱いをしている大学は72.2%。2種類の扱いをしている大学は6.9%です。そうしますと、1単位30時間の扱いをしている大学は、やはり過半数を占めていることがわかります。新潟大学でも1単位30時間の扱いをしているわけで、そういうのを今現在検討をしているという状況であります。

両方の取り扱いをしているところは、例えば旭川医科大学です。ここでは、英語が演習の扱いで1単位30時間、他の外国語が講義の扱いで1単位15時間。また、名古屋工業大学では、原則として必修科目については1単位15時間、選択科目については1単位30時間。愛媛大学では、英語は1単位15時間、英語以外の外国語は1単位30時間。それから、鹿児島大学では、基礎能力を習得し、基本的な運用能力を養うコア科目については1単位30時間で、コア科目で取得した能力を応用発展させるオープン科目については1単位15時間。そして、琉球大学では語学の基本分野をすべて含む科目については1単位30時間、語学の特定分野に重点を置いた科目については1単位15時間というように、科目あるいは演習、講義の形で30時間、あるいは15時間というように計算しています。

では、次の設問に移ります。次は、外国語科目における専任教員と非常勤講師の担当はどんな割合ですかという質問に対する回答であります。これは、質問の4を見ていただきますと、一番下のほうに非常勤担当率の平均が出ております。平均的に英語は48%、ドイツ語は49%、フランス語が51%、ロシア語69%、中国語72%、朝鮮語74%、そしてスペイン語が74%、イタリア語が78%、フィリピン語が7%というような状況になっているわけです。本学でも平成8年に一度こういうような調査をしたことがあるのですが、そのときの本学の非常勤講師の担当率というのは47.4%でありましたが、今現在は50%以上を超えておりまして、確実に担当率が高くなっているという状況であります。

先ほどありましたように、傾向としてはなるべく学生に多数の言語に関心を持たせながら学ばせる、あるいは英語は手段としての能力として高め、そしてほかの初修外国語については、多くの外国語を開いていこうという傾向に対して、こういう厳しい現実があるということなのです。

質問4と5なのですが、独法化に向けて外国語教育体制の見直しをしていますかという設問に対して、「はい」と答えた大学が26%、「いいえ」が73%でした。「いいえ」が多いのですが、「はい」と答えた大

学については、資料を見て下さい。A、B、C、Dというのは、必修体制を見直しをしているというのがA、卒業要件単位数を見直ししているというのがBです。そして、授業のクラス規模を見直しますというのがCで、Dはその他です。複数回答なのですけれども、クラス規模を検討したいというのが一番多いです。そして、卒業要件体制の見直しをしているというのが、その次の68%。そして必修体制を見直ししているのが57%という状況です。

その他で答えた機関は36%ありまして、どんな答え方をしているかといいますと、例えば茨城大学は「習熟度別クラス編成について検討中である」です。それから、長岡技術科学大学では、「全学的な視点に立って体系的に英語教育を実施することを可能とする組織づくりを検討中である」ということです。広島大学では、「TOEICを全学の学生に毎年受験させることを検討中である」。高知医科大学では、「統合があるという意味で、共通科目の科目について検討中」。そして、大分大学では、「現在見直すべき項目を検討している段階である」。まだ検討段階ということ。それから、鹿島体育大学は、Dがついていませんけれども、「現在学内措置として外国語を含む教育センター構想を検討している」といったようなお答えが寄せられました。

以上の状況から見ますと、私自身、専門外なのできちんと把握できておりませんが、大体が先ほど言ったような英語を中心としながら、初修外国語の多言語化を図りながら開講したい、というのが現状だと思います。そのためには人員の問題等がありまして、まずはどのような形態でやるか、組織とか、あるいは単位数見直しとか、必修体制の見直しとか、そういうことをしながら改革を進めているという段階にあるということではないかと思われまます。

以上、簡単でありますけれども、私の報告を終わらせていただきます。

## 報告2 (質疑・討論)

### ●司会

では、ただいまの報告に対して御質問、御意見等ございましたら、よろしく願いいたします。

特によろしいでしょうか。はい、どうぞ。

### ●鈴木

経済学部の鈴木と言います。

今年度から1年生に経済学部国際コミュニケーションコースで、これは英語、フランス語、それから中国語があるのですが、英語の責任者になっています。実は、6カ月ハバロフスクの経済法律アカデミーというところで、その英語教育の実態を調査して、2月の末に帰ったばかりなのですけれども、それで感じたことをちょっと申し上げます。

今、外国語をどうするか。これを検討しない限り、どんなことをやっても無理だという感じが僕はしました。と

いいますのは、三つ感じました。一つは、ハバロフスクでは、まず、ロシアの大学って5年制です。国際関係の学科では、週4コマ5年間で継続してやっています。それから、それ以外の一般学生も週2コマ3年間必修です。それから、クラスサイズですけれども、普通、各学科が二十四、五人から、せいぜい30人です。それで、英語の授業は、それを半分に分けます。

だから、僕はまた報告書を書きますけれども、いっぱい授業に出ましたけれども、平均のクラスの人数は、10人から十二、三人です。一番多いクラスが、ちょっと先生の関係で事情があって、それは20人でした。だから、そこはもう大変な負担だからというので、教師の中にシニアティーチャーズという相当能力の高い、感心したのですけれども、その先生が担当しています。僕はずっと半年そのクラスも出してもらったのですけれども、その先生と話したら、「大変です。20人なんて数、本当は不可能なだけけれども、私が担当することで何とかしています」ということでした。「20人でそうですか」と言ったら、「新潟は、鈴木はどうしていますか」と尋ねられました。「うちは30人と50人です。2種類授業があって、運用能力のほうは30人、リーディングのほうは50人」と言ったら、「そんなのでできるのですか」と聞かれ、「いや、やっています。やってないのですけれども、人数と必修の関係でやらざるを得ないのです」と答えました。

この問題を解決しない限り、僕はどんなことをやってもだめだと思えます。先生方、いろんな教材とか、教授法とか、いろいろ工夫されてやったって、たった1年週2コマ30人、50人。「そんなことやって何か効果があるのですか」と、向こうが聞きますもの。最初はこういう質問が来るのです。「日本の学生は特に運用能力が低いと言われるのは、どうしてですか。日本の英語教育はおかれているのですか」と来るのです。その実態を話すと、「ああ、それじゃあできないのが当たり前。あなた方はよくやっている」とまず第1にほめられました。それが一つです。

それから、二つ目は、教師の能力が非常に高い。基本的に英語の授業はロシア人の先生が英語でやっています。「ロシアでは、この学校では英語でやるのですね」と言ったら、「でも、英語の授業ですからね」とみんな言います。異口同音に言います。「日本では英語の授業は何語を使って教育していますか」「それは日本語を使っています」。向こうは、「ええ一つ」と言います。ただし文法の授業なんかは違います。文法を説明しなきゃいけませんから。それから、英文ロシア語訳とか、当たり前ですけれども、ロシア語英訳はもちろんロシア語を使います。

僕が感じたのは、要するに学者は要らないということです。僕らはトレーナーが必要。実践例とか英語教育に関する研究論文はいいのですけれども、要するに僕みたいシェイクスピアだの、古典ラテン語だの勉強している、そんなのじゃ、はっきり言ってだめです。これが

第2点です。要するに学者じゃなくてトレーナーが必要。ということは、本人ができないやつが、いい学生なんか育てられるわけがないです。今、言うように、誰一人として英語で1時間授業できない教師なんかいません。23人いますけど。それが第2です。

第3は、そういうことが可能だということはどういうことかという、学生の英語の基礎力が入ったときから非常に高いです。TOEICで言ったら700点以下の学生なんかいないような気がします。大体800点ぐらいの能力はまず確実にあるような気がします。1年生の授業も幾つか出ましたけれども、特に、聞く、リスニングと、それからスピーキングの授業は、目を見張るぐらいです。僕がほとんどかなわないです。僕もそんなに低くはないと思う

のですけれども、ほとんどかなわない。特にリスニングはかなわないです。そういう学生を5年間週4コマ必修で、そういう先生方が徹底的に鍛えます。勝負になるわけがないです。

僕の結論は、とにかくそういう状況をつくらない限り、個人の努力とかなんとかでじたばたしたって絶対無理。これが結論でした。

●司会

ありがとうございました。

では、それに対しまして新潟大学ではどのように改革を進めるかということを次に御報告いただきたいと思えます。